

問題発見解決能力を伸ばすことを目指した 日本語の授業

宮崎 七湖

科目名：ケースメソッドで伸ばす問題発見解決と表現力 6-7

実施年度・学期：2010 年度春学期，2010 年度秋学期，2011 年度春学期

クラス人数：2010 年度春学期（21 名），2010 年度秋学期（21 名），2011 年度春学期（16 名）

1. 本科目設置の経緯とねらい

本科目のキーワードとなっている「ケースメソッド」とは、米国の経営学大学院において開発されたもので、ケースに書かれている内容を討議する形式で進める授業のやり方を指す（竹内 2010）。筆者は 2010 年 1 月に行なわれた、日本語教育学会教師研修会「ケース（事例）で学ぶビジネス日本語教育―問題解決型討論活動のデザイン―」を受講し、初めてケースメソッドについて知った。受講後、このメソッドが目指す「問題発見解決能力」の育成は、大学等の高等教育が目指すべきことでもあり、留学生の日本語教育にこのメソッドを援用できないかと考えた。

このように考えたのには、筆者の留学生への日本語教育に対する問題意識がある。筆者はこれまでに、留学生のレポートなど文章課題遂行過程を研究してきた。この研究を通じ、留学生が文章課題を遂行するためには、語彙や文法といった言語構造の知識のみならず、留学生が個別の状況を分析し、解決方法を選択していく柔軟な思考が必要であることがわかった。そこで、筆者は留学生が現実に遭遇しそうな問題のケース教材を開発し、問題発見解決力とコミュニケーション能力を育成することを目的とした、授業を行なうことにした。教師研修会における「ケースメソッド」との出会いと、日ごろから抱いていた留学生への日本語教育に対する問題意識によって、この科目は誕生した。

2. 科目と講義の概要

本科目の対象は、上級の日本語学習者である。全 15 回の講義中 13 回は、ケース教材をめぐる討論を行なった。第 8 回講義では自分のケースを書くための準備活動を、第 15 回講義では全体の振り返りを行なった。ケース教材は、次のような構成になっている。(a) 問題が発生するまでの経緯が主人公の心情とともに書かれた物語文（A4 用紙 1 枚）、(b) ケースの内容理解を確認するための質問、(c) ケースの問題発生の原因や解決策を考えるための質問、である。ケースの内容は筆者がこれまでの日本語教師経験の中で、学習者や周りの人から見聞きした内容や、筆者自身が遭遇した問題をもとに作成した。イメージをつかんでいただくために、ケース教材のあらすじを 2 例紹介する（ケース教材例 1，ケース教材例 2）。

<ケース教材例1：「クラスメートと……」のあらすじ>

ある科目で、ペアで発表をすることになったAさん。社交的でひそかに憧れていたBさんとペアを組むことに。しかし、何度か催促してもBさんは、なかなか準備を始めようとしない。ある日、Aさんはやっと昼食後に会う約束をした。Aさんは急いで食事を済ませて、Bさんを待ったが、Aさんが来たのは2時間後だった。Aさんは、ついカッとなって……

<ケース教材例2：「親友がほしい」のあらすじ>

夢だった1年間の短期留学をすることになったAさん。日本人の友だちを作りたいと、サークルに入ったり、積極的に飲み会に参加したりした。しかし、他人の噂話などくだらない話ばかりでつまらない。表面的なつきあいで、深い話ができる友だちができない。「なんで日本人はみんなバカ話ばかりしているのだろう」。Aさんの失望と焦りは募り、ついには自宅に引きこもってしまう。

毎回の講義の流れは以下の通りである。(1) 各自ケースを読む、(2) 各自ケースの内容理解確認のための質問に答える、(3) グループで(2)の答えを確認する、(4) グループで問題の分析と解決策を討論する、(5) クラス全体で(4)で討論したことを共有する、(6) 翌週小レポートを提出する。

3. 受講生からの反応

2010年度春学期、不安を抱いたまま講義をスタートしたが、終わってみると、非常に活発な時には、白熱した議論が展開し、筆者自身も受講生の意見に驚いたり、感心したりしながら、楽しい時間を過ごすことができた。

学習者の日頃の反応や学期末に行なったアンケートでは、概ね肯定的な評価が得られている。例えば、ケース教材例1については、講義中に「こういう性格の人(Bさんのような人)っていますよね」というコメントが、ケース教材例2については、「先生、リアルすぎます」、「わたしはAさんです」といったコメントが得られた。また、2010年度春学期と2011年度秋学期に行なったアンケート(回答者26名)では、印象的だったケースを選び、その理由を書いてもらった(自由記述)。その結果、14名の受講生から「自分にも似たような経験がある」、「同じ問題があった」、「自分にも起こりそう」、「留学生に起こりそう」、「ありふれた問題」といった、同類の問題が自分にも起こり得る、または、既に起こっているといった当事者性や問題の日常性が理由として挙げられた。このことから、受講生がケース中の登場人物の立場に立って考え、感情移入しながら、議論に参加しているのではないかと推測できる。

また、前述のアンケートで、「このクラスで学んだこと」を選択肢の中から選んでもらったところ、上位2項目は、「他の人の異なる考えや価値観」(22名)、「人の意見を聞く力」(18名)であった。さらに、この質問で「その他」を選択し、その内容を記述してくれたものには「他人の立場に立って自分の問題に気づくこと」、「直接本人と本音で話し合うことが大切」、「柔軟に問題を解決することが必要」というコメントが得られた。

2010年度春学期から、現在開講中の2011年度秋学期までに、受講生のフィードバック等からいくつかの改善を試みている。例えば、グループ分けを毎回ランダムにして、なるべく異なる人と討論できるようにした。また、2010年度秋学期からは受講生に書いてもらったケースで作成者本人

の許可が得られたものについては、講義で扱うようにしている。一方、受講生から「先生の意見やまとめ、アドバイスをもっと聞きたい」という意見があったが、これについては慎重に対応する必要があると考えている。なぜなら、この活動の目的はあくまでも自分自身で考えることであるからだ。受講生には正答はないと伝えてはいるものの、教師の意見を安易に正答と捉える可能性もある。このことは、受講生が自ら考えることの妨げにつながるであろう。今後は、これまでのアンケート調査に加え、クラス活動、小レポート、受講生へのインタビュー等の調査を行い、よりよい授業になるよう試行錯誤していきたい。

参考文献

竹内伸一（2010）『ケースメソッド教授法入門—理論・技法・演習・ココロ』慶応義塾大学出版。